慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	序
Sub Title	Preface
Author	原田, 範行(Harada, Noriyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.3 (2022. 12) ,p.1- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松田隆美教授退任記念論文集
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230003-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

原田　範行

慶應義塾大学文学部英米文学専攻において長らく教鞭を執られた松田隆美先生が、2023年3月をもって定年退職をお迎えになります。先生は、中世英文学のご研究において、国内はもとより海外においても卓抜した研究業績をあげられましたが、それだけでなく、塾内外における教育やさまざまなご公務においても、優れた手腕を発揮され、多大なご尽力をされました。そのことは、本号巻頭に掲載された略年譜と研究業績一覧からも明らかでありましょう。慶應義塾藝文学会は、文学、言語、芸術の研究を目的として塾文学部文学科研究室に事務所を置く学会で、年に2回、機関誌『藝文研究』を発行しています。その第123号第3分冊を松田隆美教授退任記念論文集としてここに刊行するのは、塾文学部を拠点とした先生のこうした多岐にわたるこれまでのご貢献を顕彰し、塾において先生とご縁のあった後学の徒が、先生のお仕事のいくばくかを受け継ぎつつ、そこから新たな芽を育てて行きたいとの願いによるものです。先生がご専門とする中世英文学の分野では、先生の研究業績を継承するような論文集が既に公刊されていますが、本号の特色はむしろ、先生の教育研究を出発点として、広く近現代英米文学や英語学の研究に接続させている点にあると言えます。言うまでもなくそれは、松田先生の教育研究が、中世英文学を中心としつつも、そうした広がりを豊かに包摂するものであったことを示していますが、それと同時に、そのような広がりを意識しつつも常に専門分野の研究を大事にされてきた先生の矜持の現れと言ってもよいかと思います。先生が、専門分野の研究の確たる成果としての種を蒔き、それが、慶應義塾において多彩な芽を吹く —— 本号を手にされたみなさまがそんな姿に思いをはせていただけるなら幸いです。

私は今回、本号の編集を担当させていただきましたが、私もまた、松田先生から多大なる学恩をいただいたものの、専門分野を同じにするいわゆる師匠と弟子というような関係にはありませんでした。松田先生のお名前を知ったのは、私が英米文学専攻の2年生に進級したときのことで、当時は全学生に配布されていた「英米文学専攻名簿」の大学院博士課程の項のトップに、先生のお名前がありました。聞けば、ヨーク大学への留学から帰国されたばかりで、中世英文学研究の若手第一人者とのこと。そういう方としてお名前は脳裏に刻まれたものの、私は18世紀英国の文豪サミュエル・ジョンソンを中心とする近代英文学研究に専念するようになり、他方、松田先生は、文学部助手として日吉キャンパスに赴任されました。当時の英米文学専攻では、安東伸介先生、岩崎春雄先生、髙宮利行先生が中世英語英文学の授業をされ、また非常勤講師として出講されていた立教大学の吉野利弘先生が『アングロサクソン年代記』を精読するというような授業もあって、私はそうした科目も積極的に履修していたのですが、自分の専門分野に頑なであった私は、大学院進学以降も近代英文学研究を続け、中世英文学についてはこれを遠くに眺めるというような学生であったように思います。ただ時折、中世英文学研究の方面から非常に瑞々しい議論が聞こえてくる ── 18世紀英文学をうろうろしている私の頭上をはるかに越えて、中世から現代の文学的動向に生き生きと、ダイナミックな形で接続するようなそんな論文を目にすることがありました。いずれも、松田先生が1980年代から90年代にかけて続々と発表された研究成果で、その幾つかは、『藝文研究』に掲載されていました。2000年代に入ってからは松田先生と共著を出版することにもなりましたが、そうした出版企画を進める中で私は、松田先生から中世英文学研究の深さと豊かさを改めて教えていただいたように思います。

松田先生の研究業績には、研究書や論文として公刊されたもののほかに、多くの展示図録があります。「寓意の鏡」「ローマ帝国からイギリス・ルネサンスへ」「信仰と学問」「究極の質感（マテリアリティ）」「（西洋）文字景」など、実に魅力的なタイトルを付されたこれらの図録は、しかし、来る日も来る日も写本や刊本を丹念に調査し、その内容や特質を丁寧に分析してはじめて明らかになる研究成果の結晶にほかなりません。写本の一葉や刊本の一ページが発する声に全神経を集中させるというような営みが求められます。松田先生は、そのようなお仕事を決して疎かにされなかった、否、むしろそうした研究を積極的に遂行し、その

成果を、図録を手にするすべての人々に還元しようとされました。表層的なテクスト理解のまま、軽薄な文学論や文化論を展開することが少なからずある昨今、そして地道な日々の研究調査の積み重ねがともすれば忘れられがちである昨今、松田先生のこうした展示図録の業績は、研究の豊かさの本質を私たちに示す指標になるものと言えるでしょう。温顔をたたえられた先生のその真髄に、常に冷静で緻密な眼差しが宿っていたことを、私たちはいつも思い起こす必要があります。

本号には、こうした松田先生のご薫陶をいただいた9名の論文が、概ね、時代順に掲載されています。松田先生の専門分野に関連して、「中世的なるもの」という共通のテーマを設定してありますが、先に述べた通り、その論述対象は、時代的にも地域的にもジャンル的にも、さまざまな広がりがあります。中世英国という、21世紀の慶應義塾から見ればかなり遠い世界の人間の営みに、いずれの論者も果敢に研究調査と強靱な想像力を及ぼし、その成果をまとめました。この九つの芽がさらにどのような形で育って行くか、松田先生にはぜひ見守っていただければと思います。いや、見守るだけではなく、今後も叱咤激励を、といささか甘えた気持ちも抱きつつ、松田先生への深甚なる敬意とともに本号を刊行させていただきます。